

## 教育実習指導における大学の役割および実習校との連携の可能性

### －実習先指導教諭の考えを手がかりとして－

国際関係学部講師 三浦朋子

#### 1. はじめに

本紀要前号の研究論文では、「教育実習事前・事後指導のあり方に関する一考察」として、教育実習前後における学生の意識や考えの変化から、実習をより充実させるために必要なことは何かを論じた。その中で本学の強みである「全実習生への巡回指導の実施」の内容を意義あるものとして発展させることを述べた。その具体的な方法の一つとして、実習生の指導を行う担当の指導教諭から、教育実習に関する課題等をさらに詳しく聞き取り調査を行うことを提案した。

教育実習の法的根拠は、教育職員免許法第 5 条・別表第一および同法施行規則第 6 条に基づいている。だが実習生を受け入れるか否かは各学校の判断に委ねられており、実習校の協力がなければ実際には成り立たない。教育現場にとって、教育実習生の受け入れは非常に負担が大きい、また学校や教師に求められる役割が多様化し、その業務も幅広く多岐に渡るようになった。そのような中でわずか数週間だけやって来る実習生の指導にあたらなければならない。それでも引き受けた先生方は、通常業務の合間をぬって実習生の指導にあたる。夜の 9 時、10 時まで実習生の居残りに付き合ってくれる話もよく聞く。教育実習が学校の“善意”により、ボランティアで成り立つ側面には問題があるが、学生を現場で育てる点では大きな意義がある。

本論では、教育実習を受け入れる側の学校において、実習生を指導する先生方の意見を整理することを通じて、(1) 実習生を送り出す大学側が指導すべきこと、(2) 実習校と大学側の連携をいかに深めるのか、の二点についてまとめたい。今回、指導教諭の意見を知ら手がかりとして、参考としたのは主に次の三点である。一点目は「教育実習成績報告表」である。これは実習終了後に学校から提出してもらい、様式は本学独自のものである。内容は、「Ⅰ 出勤状況」、「Ⅱ 担当授業時間数」、「Ⅲ 項目別評価 (三段階評価と各所見)」、「Ⅳ 総合評価 (四段階評価と総合所見)」が記載される。報告表を学生が直接目にすることはないが、大学の教育実習指導科目の成績採点の際には評価資料の一つとしている<sup>1)</sup>。二点目は、「実習生に対する総括的所感」である。こちらは学生が実習中に持ち歩く教育実習録の最終ページに添付している。表面は学生が記入する「教育実習に関する総括的感想」で、裏面は指導教諭が記入する「実習生に対する総括的所感」となっている。学生は実習最終日までに自分の感想を記入し、指導教諭に所感の記入をお願いする。記入された用紙は各自が受け取り大学に提出させている。A4 一枚のなかに、実習生の感想は 800 字前後、指導教諭の所感は 600 字前後が書ける記入スペースをとっている。三点目は、「教育実習ⅠⅡ」の授業内で実習の事後指導の一環として課題にした「指導教諭へのインタビュー」のレポートである。これは昨年(2015)年度から始めたものである。実習を終えた 4 年生が夏季休

暇中に実習校に行き、実習中は十分に聞けなかったことや、実習を終えて数カ月を経た今だから知りたいことなどを聞き取らせた内容となっている。これら三点を中心にして、指導教諭からみた教育実習の様子、実習生への指導上の考えなどをもとに考察したいと思う。

## 2. 本研究の契機

はじめに指導教諭への聞き取り調査を行おうと考えた、直接のきっかけについてふれておきたい。それは実習生と指導教諭との間の関係構築が、実習がうまくいくか否かのターニングポイントになっていると感じるからである。教育実習の事後指導では、時折、指導教諭との関係がうまくいかなかった学生が見受けられる<sup>2</sup>。詳しい事実関係は、学生側の言い分しか把握できていないところがあるかもしれないが、その様子をいくつか紹介する。

〔1〕 実習終了後に必要書類を実習校に取りに行けなくなるほど、実習中の出来事に深く傷ついた様子が見受けられた例

〔2〕 指導教諭が実習の事前打合せを無断で欠席し、その後も指示された内容が頻繁に変わる、事前相談の通りに行ったことをあとで皆の前で叱責される等の例

〔3〕 実習生本人が違和感を覚えるほどの極端に甘い指導がなされ、指導教諭からの言動に一部不快感を抱く内容が含まれた例

これらはどれも指導教諭との関係性に問題があったと考えられる。〔1〕の場合は、学生が詳しいことを話せず、こちらも敢えて追及することはできなかった。その様子からは、忘れたい記憶として蓋をしてしまったように感じられた。〔2〕では、不満を抱えながらも何とか実習を終え、しばらくしてから詳しい話をしてくれた。自分が体験した理不尽な出来事に納得はしていなかったが、その後は気持ちを切り替えて前向きに取り組んでいた。

〔3〕では、もともと教職が第一志望の学生ではなかったが、実習が進むにつれて甘い指導に疑問を感じるようになったという。実習後に、割り切った様子で話をしてくれた。

どれも指導を受けた実習生の側からの視点である。双方のコミュニケーション不足や、何らかの行き違いがあったかもしれないが、結局、かれらは教師の指導の意図を理解し、納得することができないままに実習を終えた。どれも共通しているのは、こうした事実がわかるのは、実習を終えてだいぶ経ってからである。実習中に相談してくることはほとんどない。実習期間中に行う各学校での巡回では、とにかく学生の様子を注意深く見るしかない<sup>3</sup>。

このような自分自身の体験から、学生の教育実習をより多き内容にするために、できる範囲で大学側が実習を受け入れる学校側の要望を知り、それを実習の事前・事後指導に活かす必要性を感じるようになった。

## 3. 実習校からみた教育実習～指導教諭の考えを手がかりとして

以下では、学校側からみた教育実習について、実習生を指導する立場にある指導教諭の方々の考えや意見を手がかりに整理していきたい。内容は大きく分けて次の四点である。一点目の「(1) 教育実習生の印象」については、主に実習後に行った指導教諭インタビューを参考にまとめた。二点目以降の「(2) 教材研究、教科指導」、「(3) 生徒とのコミュ

ニケーション」、「(4) 教育実習生の姿から学ぶこと」は、「成績報告表」や「実習生に対する総括的所感」の中から執筆者がとくに注目した事柄を多かった順に列挙した。

#### (1) 教育実習生の印象など～指導教諭インタビューの結果から

今回参考にする指導教諭インタビューについて、若干の補足をしておく。インタビューは前期に実習を終え一段落した夏休み中などに行っている。また指導教諭に尋ねる内容は、あらかじめ学生自身が考えたものである。とくに多かった質問例は、「①実習生としての自分の第一印象」、「②指導する上で苦労したこと、難しかったこと」、「③今後へ向けたアドバイス」などであった。なかでも②の質問は、指導教諭としての役割を任された教師側の本音を聞き出せていると思われる内容が多い。以下、インタビューの内容を紹介する<sup>4</sup>。

##### ①実習生としての自分の第一印象

・あまり良い印象ではなかった。理由は、前年の教育実習生の態度が怒られても反省しないなど良いといえるものではなかったから。その印象は全く違い、真面目な性格で熱心に取り組んでいた。(高校教諭)

・おとなしく真面目な学生かと思ったが、クラスに入ると、明るくパワフルで、声も通りとても良い。(中学教諭)

・教壇に立った時の立ち居振る舞いが初めからすごく落ち着いていた。笑顔とパワフルさで、見ていてすごくクラスの雰囲気よかった。(高校教諭)

##### ②指導する上で苦労したこと、難しかったこと

・校務分掌の担当が重なったことと、現在の赴任校では初めて実習生を担当することになり、両方に目を配ることが大変だった。(高校教諭)

・教育実習生を担当するのが初めてで、とくに指導案の指導が大変だった。実習生それぞれが持つ個々の良さをつぶさないようなアドバイスをすることに気がついた。(高校教諭)

・教師になり3年目で指導教諭をすることが初めてでした。自分ではない人がする授業だったので、その人の指導案の良いところを引き出すのが難しかったです。(高校教諭)

##### ③今後へ向けたアドバイス、その他

・一つは「ポジティブシンキング」ミスに対して必要以上に自分を責めすぎないこと、もう一つは「生徒と適切な信頼関係を築くこと」生徒と教師の関係ははっきりさせておくこと。(高校教諭)

・日々の教員生活の中では、民間企業でも活かせる部分がたくさんあります。例えば、時間を守る、期日を守る、伝達事項を伝え漏らさない、聞き漏らさない、言われたことを言われた通りに遂行する、などです。とくにこれらは厳しく指導させていただきました。(高校教諭)

・アドバイスに対して素直な態度で取り組んでくれたので、こちらもやりやすかったです。(中学教諭)

「(1) 教育実習生の印象」では、実習生としての自分がどう見られていたのか、指導する側の大変さなどをよく聞き出している。とくに実習生の第一印象とその後の変化や、指導する上での苦労はとても興味深い。それぞれの学校の事情や教師が抱えている仕事、経験はまったく違うため、指導内容にも影響する。また第一印象とその後の印象が変わるのは、それだけよくその実習生と向き合ってきた表れである。

## (2) 教材研究、教科指導

つぎに教材研究や教科指導に関する指摘である。以下に、指導教諭からの意見を紹介する。

- ・伝えるべきは概念であることが多いため学問的な意味でこれを正確に理解し、専門用語も丁寧に調べる必要がある、基礎知識の充実を望む。(高校公民)
- ・教材研究をする中で、教科書をもっとよく読み込み、社会的事象や用語等の理解が深まれば、もっと良い授業ができたでしょう。(中学社会)
- ・授業において正確性を欠くことが何回か見受けられました。身近な事例を授業内に取り入れる事は、生徒の興味・関心をひく為にとっても重要な事ですが、その前提になる知識・理解が疎かにならないよう、今後も常に自己研鑽に励んでいてもらいたいと思います。(高校公民)
- ・学習範囲をすべて時間内に収めていたのはよかったが、一方的な授業になっていたため、注意喚起や机間巡視、発問をして意識を向けるなどができるともっと良い授業になった。(高校公民)
- ・アクティブラーニングがこれからどんどん増えてくるので、先生の腕が試されることが多くなる。知識はしっかり持っておいた方がいい。(高校公民)
- ・教えるには学ぶ以上の知識、そして伝える技術が大切となります。(中学社会)
- ・日常生活の中にたくさんの教材が落ちています。それを見つけることができると授業内容も広がってくると思いますので、アンテナを高くして教材研究をしてみるといいと思います。(中学社会)
- ・創造的な活動をするには、教員自身の想像力と創造性も問われます。英語力は大きな課題です。(高校英語)
- ・課題は Classroom English を使うことと指示の出し方です。英語の4技能(聞く、話す、読む、書く)を高めるための活動にはどのようなものがあるのか、その教授法や活動内容などを研究していくと更に良いでしょう。(中学英語)

ここで取り上げたのはごく一部だが、内容として教材研究や教科指導に関するコメントは、学生に対する評価や要望の中でもっとも多い。子どもたちの基礎学力低下が言われて久しいが、大学生の学力低下についても例外ではない。「1 教えるためには 10 を知る」といわれるが、自分の知らない知識を貪欲に学びとり、最新の情報を把握しようとする努力がとても大事になる。指導教諭も強く指摘するこれらの事柄は、実習生を送り出す大学側の課題として、今後検討の余地があるだろう。例えば大学によっては、教育実習指導の一環として実習開始前に中学校レベルの試験を行うことや、朗読・話し方の実技テスト、教育用語のテスト、漢字テスト(筆順を含む)などを行い、学生の到達度を確認し、補充指導を徹底するところもある<sup>5)</sup>。

一方で、実習生の努力が評価されている意見もある。

- ・生徒が意欲的に学べるようにと自作のクロスワードやビンゴ、ロールプレイ用の資料を作成するなど随所に工夫が見られ、楽しくわかりやすい授業づくりに努めました。(中学社会)

- ・授業を実践する毎に反省し、次はこの部分を修正するというものがはっきりと持っていた点が良かったと思います。生徒にわかりやすく伝えるにはどうすれば良いのかを、何通りも考えて授業に向かう姿に成長を感じました。(中学社会)
- ・生徒に現実の問題を考えさせるために多くの教材を準備して授業に臨みました。生徒は普段考えたことがないテーマについて学び、理解を深めることができたと思います。(高校公民)
- ・オリジナルの資料の内、導入に使用した写真等の選択眼には優れたものがあり、授業の構成にも創意工夫を凝らし生徒の興味を喚起することが出来ました。(高校公民)
- ・学習指導案を作成するにあたり、本時の目標、指導ポイント、板書計画、提示する例などを明確に立案していました。また、指導教諭とディスカッションし、その結果を学習指導案に反映する努力をしていました。(高校商業)
- ・ICTをうまく使いこなし、生徒も楽しみながら授業に参加していました。手作りのカルタやワークシートも活用しながら展開を行い、指導案に沿って授業をすることができていました。(中学英語)
- ・扱う題材に向けた文脈設定が非常に巧みであった。各種資料を活用し、ペアワーク等を効果的に実施し、本文内容へとスムーズにつなげていた。細かい文法項目も十分な下調べがなされ、説明も正確であった。(高校英語)

上の意見にみられる共通点は、実習生自身が試行錯誤しながらも、どうすればより良い授業になるのかを自ら考えて実践していることである。その背景には、指導教諭の助言があり、実習生の大きな成長につながっている。

### (3) 生徒とのコミュニケーション

つぎに生徒とのコミュニケーションに関する意見を紹介する。

- ・もっと多くの生徒と交流できたら尚良くなったと思われれます。
- ・生徒の名前を覚えることや休み時間給食時間中など、生徒と関われる時間を大切にしてください。
- ・教師と生徒という立場に関して認識が甘い場面も見受けられました。
- ・教師側の立場を考えた行動をとれると良いと感じた。
- ・できるだけ多くの生徒とコミュニケーションをとるとよかった。HRの生徒とは一言でも良いから全員と会話をしてほしかった。

生徒とのコミュニケーションや距離の取り方については、教材研究や教科指導に次いで指摘が多い。学生本人の性格や人柄によっても、生徒との距離の取り方は異なり、自分なりの生徒との関わり方を掴むしかない。実習の事前指導でも教育実習録に示している通り、授業外での学校行事やホームルーム、掃除指導、部活動などに参加することが望ましく、積極的に打ち解ける努力をするよう指導している<sup>6</sup>。学生によっては、実習開始までに生徒の顔と名前をすべて覚えて実習に臨み、空き時間はすべて生徒と交流する時間に充てたという学生も多い。ただし生徒と仲良くなりすぎてはじめがなくなり、授業時や注意したい時に十分な指導ができなかったといった体験談も聞く。できるだけ普段から子どもたちと接する機会をもつことや、実習中に他の先生方の生徒との距離感をよく観察することが必

要である。実習生は生徒との年齢も近いので、それを活かした関わり方を築くこともできるのではないだろうか。

#### (4) 教育実習生の姿から学ぶこと

実習生が謙虚な姿勢でたくさんのことを学んできたと同時に、指導教諭からも次のような言葉を得られた。

- ・非常に熱心に授業準備に力を注いでおり、その姿勢は私自身も見習わなければならないと感じています。
- ・授業では言語活動の実践に取り組み、生徒たちが主体的に授業に参加する授業づくりは、現場の教員にも示唆に富むものであった。

学生本人から実習の様子を聞くと、随分厳しく指導を受けてきたような印象を受ける。しかし彼らの報告とは裏腹に、指導教諭からのメッセージの中には意外なほど褒めている内容も多い。教育実習の根底には改めて実習生の熱意や意欲、謙虚に学ぶ姿勢が大事になることを感じる。

### 4. 教育実習を充実させるために

#### (1) 実習生を送り出す大学側が指導すべきこと

これまで紹介してきた指導教諭からの評価や意見をふまえて、実習生を送り出す大学として、できる指導とは何かを考えてみたい。

第一に、教壇に立てるだけの知識を実習に行く前までに、日々蓄えるように促すことである。社会科・公民科教育法の授業では、中学高校レベルの知識を確認する小テストを行っている<sup>7</sup>。しかしその学習量は十分ではなく、授業づくりの前提として有すべき知識が圧倒的に不足しているのが現状である。さらに社会科の免許取得を希望する学生から「面白い授業、楽しい授業をするために、雑学的知識をたくさん増やしたい」という言葉をよく聞く。本当に必要なのは小手先の指導技術でも雑学でもない。様々な文献、資料などに裏打ちされた正確な知識やそこにある無数の解釈、最新の情報なども常にデータを更新しながら、自らの知識を積み上げていく必要がある。

現行の学習指導要領では、21世紀の現代社会を「知識基盤社会の時代」と位置づけている<sup>8</sup>。これは新しい知識・情報・技術が、社会のあらゆる領域で活動の基盤となるからである。さらに次期学習指導要領の改訂に向けた教育課程企画特別部会の論点整理では、「将来の変化を予測することが困難な時代」と位置づけられた<sup>9</sup>。そのような将来の予測が困難な複雑で変化の激しい社会において育成すべき資質・能力が、3つの柱として示された<sup>10</sup>。「i) 個別の知識・技能、ii) 思考力・判断力・表現力等、iii) 学びに向かう力、人間性等」である。昨今の教育現場ではアクティブラーニングや言語活動の充実が注目されがちであるが、活動の根幹にある学習内容としての知識や技能の内容を吟味できる視点が必要である。そのような学生の育成を図ることが、大学の教員養成として担うべき役割の一つと考えられる。

第二に、教材研究や模擬授業の質を高め、授業構想力や指導力をより実践的なものに近づけることである。大学での模擬授業は、中高の教室空間を十分に再現しきれていない。その理由はいくつかあり、学生が生徒役になりきれないこと（学生同士の遠慮が生じる）、

中高生の反応が予想できないこと（接する機会の少なさ、想像力の乏しさ）などがある。前者は学生間の緊張を和らげ学校の教室空間を演出するなどの対応が考えられる。後者は姓と理解が不足することで授業内での発問を考えたり、学生の中に双方向の授業イメージが持てない状況が生じている。その解決策の一つとして、学校の公開授業や公開研究会に参加し実際の授業の様子を参観したり、映像の授業記録等で具体的な授業場面の様子を描けるようにしている。ただし、大学の授業との兼ね合いで実際の授業を見学できる機会は十分に確保できていない。今後は、近隣の教育委員会、中学校に協力を依頼して、授業準備の補助などを含めた授業への参加、あるいは学校インターンシップ科目の新設なども検討していくことが望ましいと考えられる。

指導教諭の実習生に対する評価や要望をみて改めて感じることは、大学の教職課程でできること、すべきことは一層の力を注ぎ、教育実習中に学べることや気づきは、現場で指導される先生方の協力を仰がなければならない。そのために実習校と大学のさらなる連携強化をどのように目指すのかについて、次項で検討したい。

## （２）実習校と大学側の連携をいかに深めるのか

教育実習において実習校と連携した指導を行うことは、中央教育審議会答申でもかねてより指摘されているところである。また、できる限り母校実習を避ける方向での見直しが必要とされている理由には、大学近隣の学校で実習を行った方が学校・教員との連携を図りやすことがある。しかし、首都圏のように大学が集中する地域では、実習校の確保は容易ではない。そのような点からも、本学では全実習生への巡回指導を行っており一定の効果がある。

本来、教育実習は大学で行う実習の事前・事後指導と、各学校で行う実地指導としての教育実習とが一体になって構成される。しかし一体とはいえ、現実には大学で行う指導と実習先で行われる指導が十分に連携されているとはいえない状況がある<sup>11</sup>。母校実習をベースとした現在の実習では、大学も実習校も双方での指導を受けてきたという前提に立ち、それぞれのなすべき指導を行っている。大学附属の学校を有する大学では、そこに実習生を送り出すという形態をとっていることが多いため、実習先の学校、教員と指導についての意見交換や実習計画の検討など学校との密なやり取りも可能である。頻繁に全国各地の実習校と連絡を取り合うことが難しいが、今後、何らかの形で学校現場との間でお互いの状況の理解や、実習や教員採用に関する情報共有、意見交換を進めながら関係性を構築することが必要である。

現在、文部科学省が推進している「学校インターンシップの導入」も連携を深める方法の一つである。学校インターンシップは、普段大学に通いながら定められた曜日や時間帯を大学や自宅近くの学校に週1回から数回程度のインターンシップを継続して行う。そこで学生には学校業務全般（教育活動、校務、部活動、その他の補助業務）を体験させるものである<sup>12</sup>。実習とは別に大学2、3年次などの早い段階から、学校とのかかわりを長期的にもつことで学生が学校現場を深く知る機会となる。またこれらの活動は大学の単位として認定し、事前指導やふり返り活動なども大学で行う。それにより、実習生の体験をすぐに大学にフィードバックでき、学生を中心に学校と大学間での双方向の指導を行いやすい。先駆的な大学では、すでに十数年以上前から取り組まれており、文科省の後押しの背景も

あって近年では全国的に単位化する大学が増えてきた。このような学校インターンシップや教育ボランティアなどの科目を、単位化することができれば、教師を目指す学生にとっては、きわめて実践的な学習機会を得ることになる。

また亜細亜大学では、2015年12月1日に「亜細亜大学と小金井市との包括的協働・連携協力に関する協定」が締結された。この中の協働・連携協力項目には、以下のような内容が含まれている。「(1) 教育研究・学校教育・生涯学習に関すること。」「(2) 人材育成に関すること。」「(3) 地域活性化に関すること。」等である。こうした協定を活かして、小金井市をはじめ武蔵野市や三鷹市などとの間でインターンシップや教員養成をともに行える新たなしくみをつくることも考えられる<sup>13</sup>。こちらから学校現場の中に積極的に入っていくことが求められる。

## 5. おわりに

本稿では、実習先での指導教諭の意見を手がかりとして、学生が充実した教育実習を行うための教育実習指導のあり方を検討してきた。一つは大学でなすべき指導とは何かを見直し、もう一つは学校現場との連携を強化するための仕組みを考察した。大学教育そのものが大きな変革を迫られる中で、国による昨今の教員養成制度に関する様々な提言、政策は、教師としての即戦力や実践的な内容が数多く盛り込まれる傾向にある。それらの方向性をふまえて、各大学がどのように対応していくかが問われている。一方で、大学においては、教育のあり方について思索を深めたり、現在の学校カリキュラムや教育課題についてじっくり考える機会をもつことが大切である。そこから、地に足のついた教材研究や授業開発を行える、教師としての資質能力が備わっていくと考えられる。大学で学べること、学校現場で学べることの両方を見据えて、今後はさらに大学と学校が密に連携・協力して大学での教員養成の基盤を築いていくことが求められる。

---

### 【注】

<sup>1</sup> 「教育実習成績報告表」については、その評価が大学の教職科目の単位認定に直結するわけではなく、評価を行う際の参考資料としている。しかし、評価の内容はその学生に関するものであり個人情報のため、本稿では学生個人が特定される内容は除外し、指導教諭の実習へ対する考えを明らかにする範囲で研究の対象とする。個々の記述は実習生個人に向けられたものであるが、それらを分析することによって全体の傾向をつかみ、一般化できることを明らかにするのが本稿の目的である。

<sup>2</sup> 拙稿「教育実習事前・事後指導のあり方に関する一考察」亜細亜大学課程教育研究紀要、第3号、2015年、p.9

<sup>3</sup> 実習生が実習期間中に問題を起こすことを避けたいと思うのは当然である。これまでの巡回経験から一つ言えるのであれば、実習校に訪問した際に担当の指導教諭と話ができなかったときはとくに実習生と指導教諭との関係を注意深く見るようにしている。

<sup>4</sup> インタビュー結果の参照に際しては、個人が特定されるような回答内容を外したほか、言い方を簡略化したところがある。

<sup>5</sup> 上越教育大学『教育実地研究の手引（実習校用）平成27年度版』

<http://www.juen.ac.jp/080faculty/files/H27jisshukotebiki.pdf> 2016/10/9 アクセス

<sup>6</sup> 栗田充治・板垣文彦・三浦朋子『亜細亜大学 教育実習録』亜細亜大学教育実習実施委員会、2015年、p.45

<sup>7</sup> 例えば、教職に関する科目では「社会科・公民科教育法」の授業内で「高校政治・経済」



---

の小テストを行っている。通常、教科教育法では、教材研究、学習指導案の作成、模擬授業などが主であるが、学生の有する知識の量、質ともに教材研究を行うには不十分な状況がある。またそのような場合には、学習指導案を書けないことが多く、模擬授業を行っても教科書の太字項目をなぞるだけの授業になりがちである。

<sup>8</sup> 文部科学省『中学校学習指導要領解説』2008年、p.1

同上『高等学校学習指導要領解説』2010年、p.1

<sup>9</sup> 「教育課程企画特別部会論点整理」2015年8月26日、p.1

<sup>10</sup> 同上、p.6,pp.10-11

<sup>11</sup> 実習校にしてみれば、個々の実習生が大学で具体的には何を指導されてきたのかを理解されていない部分は多く、同じように大学でも実習校での細かい指導内容までを把握できていない面がある。

<sup>12</sup> 中央教育審議会『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（答申）』2015年12月21日、p.33

<sup>13</sup> 例えば武蔵野大学では、教育インターンシップや教育ボランティアのほかに、各自治体の教育委員会等が行う教師養成プログラムへも積極的に送り出している。

武蔵野大学 HP「教員を目指す学生にとって有益な活動」参照 2016/10/10 アクセス

[http://www.musashino-u.ac.jp/career\\_international/teachers\\_license/internship.html](http://www.musashino-u.ac.jp/career_international/teachers_license/internship.html)